村川信彦翁の像
（隈府東正観寺）

温泉観光都市・菊池
再興へのキーワード②

『歴史』

菊池温泉をＰＲする上で、その歴史を知ることは大切なことです。
菊池温泉がどのようにして誕生し、県内有数の温泉郷になったのか―。
菊池が温泉観光都市になるまでの歴史を振り返ってみましょう。

初の温泉掘削

菊池は歴史と文化のまちとも言われますが、菊池温泉の歴史は意外と新しく、初湧出は昭和29年10月30日となっています。最初の温泉掘削に挑戦したのは、昭和9年5月のことでした。

当時の住民たちは、湯治と言えば、隣の山鹿・熊入・宮原、近郊の阿蘇・杖立などへ一日がかりで出かけていました。もちろん、現代のように整備された道路はなく、起伏の多い山道を通るなどして、大変な苦労があったそうです。

菊池川流域には、玉名温泉、山鹿温泉、植木温泉といった歴史の古い温泉がありました。同じ流域である隈府地区にも温泉ができないものかと、３４９人の有志が３、０００円（当時米1俵10円18銭）を出資して、玉祥寺地区内に温泉地を選定し、掘削しました。しかし事前調査が足りず、使用した機械も非力であったため、途中で挫折し、結局取りやめになってしまいました。

昭和20年8月、終戦を迎え、社会は混迷し先の見えない状況でした。そんな中、当時の隈府町商工会の村川信彦会長が、「この町を観光都市として発展させるために、何としても温泉を掘削しよう」と決意し、立ち上がりました。

菊池温泉コラム①
白龍と薬師如来

温泉掘削に執念を燃やしていた村川会長は、ある晩夢を見ます。城山の高台に立っていると、下のほうから白龍が昇ってきました。その後ろに立っている美しい女性が、「子どもの龍をご覧なさい」と言うので、馬場の方面を見ると、そこにはたくさんの子白龍が湯煙の中で戯れている、という夢でした。この夢により、村川会長の決意は確固たるものになったとのことです。これを記念して、東正観寺にある薬師堂には薬師如来像が安置されています。

薬師如来像

町費と地質調査

いよいよ温泉を掘削するとなると、その資金として1、０００万円が必要なことが調査の結果で分かりました。しかし、小さな町の商工会だけでは、この大金の全てを賄うことはできません。そこで村川会長は、当時の隈田町長に、町の発展のためと資金の捻出をお願いしました。町議会に諮られた結果、「温泉が出れば急速な発展が期待できる。しかし事業は大金を要するため、十分な地質調査が必要」との回答でした。

昭和26年11月から翌年の5月にかけて、大学教授などの見識者を交え、水質・温度・地質や地層など入念な調査を行いました。しかし、その調査の結果報告を受けた町は、昭和28年1月の議会で「町の事業として進めることはできない」との見解を示し、町費による掘削事業は残念ながら見送りとなりました。

資金集め

村川会長は仕方なく町費による掘削を断念し、商工会で受け持つことに覚悟を決めました。町の補助金２００万円の確保はできたものの、残り８００万を捻出しなければなりません。

村川会長の不退転の決意と、商工会関係者の一致団結により、土木組合や有志などからどうにか６００万円を集め、商工会の資金と合わせやっと念願の1、０００万円を集めることができました。何としても温泉を湧出させたい。そして町発展の原動力にしたいという有志の援助と協力があったからこそ、困難な目標を達成することができたのではないでしょうか。

温泉湧出

昭和28年、掘削地点を東正観寺とし、着々と準備を進め、昭和29年4月26日、起工式が行われました。この日から周囲には掘削音が響きわたり、工事は休み無しに続けられました。

90ｍ、１８０ｍ、２２０ｍと深度が深くなるにつれ、温度計の目盛りは上がっていき、ついに深度２３５ｍ地点で45度３分を記録。念願だった45度の泉源を突き止めました。

そして運命の10月30日。3馬力のタービンを据え付け、天然温泉を吸い上げることに成功しました。

菊池温泉誕生の地

温泉観光都市の誕生

商工会は取り急ぎ湧出する温泉を引いて、約60人が入浴できる仮設浴場を作りました。お湯の成分は、当時の県衛生部の調査によると、「弱アルカリ性で、硫黄分を微量に含んでいるが、こんな良質な温泉は県下でも珍しい」ということで、毎日入浴客で大にぎわいだったそうです。この仮設浴場こそ菊池温泉の出発点であり、温泉観光都市・菊池の誕生でした。この後、柔らかな泉質で人気を博した菊池温泉は、菊池渓谷をはじめとするその他の観光資源と結びつき、九州そして西日本へと名前が知られていきました。

菊池温泉観光旅館協同組合では、昭和29年10月30日に初めて温泉が湧出したことにちなみ、毎年10月30日を「温泉湧出の日」としています。その日には、温泉の恵みと温泉発掘に携わった人々に感謝をこめて、薬師祭が行われています。

村川会長をはじめとする先人たちのたゆまぬ努力により、今の温泉観光都市が存在しています。この偉業に感謝しつつ、菊池温泉を楽しみましょう。そしてこの観光資源を大いに活用し、まちを豊かにしていくことが、今を生きる私たちの使命なのではないでしょうか。

薬師祭

参考資料：「菊池市史」「菊池温泉掘削物語」「薬師如来と隈府温泉」

菊池温泉コラム②
村川会長の覚悟

村川会長の手記の中に、有田義行副会長との懇話が記述されています。それによると、温泉掘削の大事業が失敗に終わったときは、「自分の家、屋敷一切を売り払い、竹瓦葺の家にでも入って、拠出者へは出資金（600万円）の半分でも返却せねばならぬ」との覚悟があったそうです。それを聞いた有田副会長は「会長だけに責任を持たせることはできません。自分がその半分を持ちます」と答えています。この会話からも、気持ちを一つにし、一丸となってこの事業にあたったという決意の強さをうかがい知ることができます。

村川信彦翁（むらかわのぶひこ）

明治30年4月20日生まれ。昭和22年以降町会議員3期、商工会長10年を務める。昭和52年1月名誉市民となる。昭和61年没。

＜キリトリ＞
旅館組合
温泉入浴券
（広報きくち）
有効期限：H23.12.25